

小田原史談

第 162 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2-13-20

立木望隆氏と歴史

岸 達 志

立木望隆氏といえば北条早雲とい
うように、当地方で郷土史に関心あ
る人にとっては知らぬ者はなく、戦
後の地方史発展の功労者であった。

『神静民報』に眞説北条早雲を連
載したのが昭和四十四年であり、こ
れは昭和四十六年に『北条早雲 素

生考』として出版され、この本と前
年に出した『概説北条幻庵』とはま
さに氏のライフワークと申すべきで
あろう。その他『箱根の関所』『小田

原史跡めぐり』『曾我兄弟物語』等々
多くの著作をされたし、又、地方史
を中心とする『郷土文化』(月刊)を

ありし日の立木望隆氏



昭和五十七年からは、雑誌
『吾間乃道』を平成七年迄に、
四十三号発行している。歴史
に関する講演、史跡案内等は
数知れず、氏の名調子を聞い
た人は多かるう。

氏は、大正二年一月十八日
市内穴部あなべに誕生、本年六月十
一日八十二歳にて永眠せられ
た。生家は、穴部村の名主で
あって、江戸時代は箱根關所
の関番を勤めたという旧家であ
った。このまま順調にゆけ

追悼録

ばよかったのだが、大正九年一月廿
四日当時世界的に猛威をふるったス
ペイン感冒のために母トヨさんがな
くなり、三日後の廿七日には父鬼一
郎氏が不帰の客となる不幸にめぐり
合ったのであった。両親とも三十を
すぎたばかり、望隆氏は僅か七歳。

こうした恵まれざる境遇の中、一時
親戚の藪田商店に身を寄せた望隆少
年は、青雲の志もだしがたく上京、
昭和改元の頃から昭和二十年三月疎
開して郷里に帰る迄の二十年間東京
生活となる。その間軍需会社等に勤
務されていたらしい。今私は望隆少
年と書いたが(何時から望隆と名のつ
たか知らないが)、氏の戸籍名が美義
というのを知る人が少ないであろう。

私が氏を初めて知ったのは、終戦
後間もなくの頃で、久野中宿なかじくの市
川安国氏宅に假寓しておられた。私
の家の近くであったし、あの人は俳
句の先生だという話が聞こえてきて、
なんとなくおたずねした訳であった。
会ってみると芸術全般に関して造詣
がふかく、話題も極めて豊富である。
それで親しくなると、以来五十年に

もなる。その頃の氏は戦中の無理か
らの結核療養中の身で俳句に親しん
でおられ、久野の青年男女の有志が
だんだん集まってくるようになった。
氏の話では、少年時代藪田商店に勤
務中、『薬業新聞』というのに投稿

したのが始めて、その後原石鼎に師
事していたという。二宮町に穩栖し
ておられた石鼎の所にいった話もよ
くされ、一時『鹿火屋』の編集にも
従事された、私は俳人立木杜天居士
にまず出会ったといえよう。

その頃、久野屋山ひしやまに先史遺物が出
土し、出入りの青年(故市議遠藤周
平氏か?)がそれを持ちこんできて、
私にも相談があった。しかし、当時
小田原には考古学の人がいない。そ
こで私は横浜の石野瑛あき先生の所へ持
参し、先生が見学に来られた(私の
母の父が石野先生と親しい関係にあつた。
この経過は『小田原市史』古代篇に紹介
されている)。これが立木氏と歴史と
を結ぶ第一段階であった。俳人立木
杜天居士が歴史立木望隆先生となっ
ていった因縁にかかわったことを思
うと感慨ふかいものがある。

假寓先の市川家から百米余の所に
北条幻庵屋敷跡があつて、今に北条
時代の遺構を残す庭園があり、氏は
だんだん幻庵研究に打込み、ついで
父親の早雲研究へと進んでいったの
である。それだけならば、よくある
地方史研究者、郷土史家、の成り立
ちとそう変わらない。しかし、望隆
氏の研究はそれではなかつた。
昭和廿九年に、幻庵屋敷内の庭園
を見下ろす靈廟の後ろに、氏は自ら
の私庵を結んで住み、幻庵文庫、郷
土文化研究所という表札をかかげた。
「幻庵が自分か? 自分が幻庵か?」
「早雲が自分か? 自分が早雲か?」

とりつかれたような研究の毎日であった。主著『北条早雲素生考』では備中出身説を提唱されたが、その先駆者藤井駿教授は序文の中で研究に対する真摯な態度と、異常なほどの情熱には全く頭がさがる」と書いているとおりである。史料文献にとどまらず、駿河に、宇治に、岡山井原へ、土地を踏破し、人を尋ね、それこそ空の際、地のはて迄、行きつくさねばやまじという根性の結晶がこの一著である。この本にしても、どの本にしても、立木氏の著作が他の歴史書と一味違うのはそこである。

そしてその秘密は、俳人として出発した氏の詩魂にあると私は思っている。私にいわしむれば郷土史家立木望隆氏の本質は詩人にある。氏の強い主張と妥協を許さぬ個性に出合った人は多いと思うが、考えれば、あの学究あ探究の源はそこにあると考えられる。氏は父母早世の環境にあつて独立独歩、自由なる詩藻の世界に遊んだ。そしてもう一つ歴史先人の世界に自らを投影せんとしたのが史業であつたと思う。

それにしても、恵まれない事情と健康とを克服して、定職ももたず、思うままの生涯を送つた故人は現代にまれな一生であつて、誰にもまねのできることはない。それを理解し協力した立木夫人、と周囲門下の人たちに、ふかい敬意をおぼえる。

私の知る後半生の立木氏は、俳人、史家、ジャーナリスト、文化人、であつて、一口に要せば生一本の自由人といふべきであつたと思う。それにくらべ、常識的に生きている私など、さぞなまぬるくみえたに相違ない。改めて多年の御厚誼に深く感謝する次第である。

自己をいつわらず、逆境を梃子として詩魂を燃焼しつづけ、常に共鳴者に囲まれて、にぎやかに一生を送つた氏は、「男子の本懐」と申すべきであつたらう。

夏草の
中に起すや古石佛
古墳見て
夕の花野を戻りけり

杜天

追記
(1)氏には句集『句寿籠』があるが氏の意向で句帖式で製本されていない。定本句集出版を望む。
(2)神静七月廿二日号掲載の小稿「杜天さんの人間像」も参照されたい。

哭西山校友会綜長

ふくほうつたえきくせんにおもむくと
鵬報伝聞師赴レ泉
るいかしゅうとうともにくせん
涙河春雨泉 幾濺
しゅうふうさつぱいとうをゆるがし
愁風颯颯揺レ梅簫
ひあいしゅうくしょうほくのてん
悲靄肅肅湘北天
きょうどしよじんにあいきまなるし
郷土庶人無レ極レ愛
しんまごくせんけんのごとし
心磨克己如レ仙賢
あつかいそうにんたくをとなない
嗚呼会綜長ニ仁徳ニ
ふめつのめいせいしへんにそうたり
不滅名声崇ニ四辺一

平成七年七月一日

川瀬速雄

鵬——不吉の鳥
(フクロウ)
泉——ともに、及ぶ
梅簫——梅と大きな竹
(先生の姿質を表わす)
仙賢——仙人と賢夫
会綜——会を束ねる
(校友会長)
崇——たかし

畏友立木望隆氏逝く

高田掬泉



立木望隆氏(左)と私 城前寺にて

私が杜天(望隆氏の俳号)さんと最後にお会いしたのは平成四年六月、下曾我城前寺の傘焼の折であつた。久方ぶりに偶然出遭つた二小僧がよく顔を合わせていたので、懐かしい思い出を秘めた友であつたのだ。その後私が俳句の世界に入ったときには彼は小田原俳壇の大先輩であつた。しかし彼と私の関係は句友というより、私が郷土史を学ぶ中で数々の恩恵に預つた畏友といった方が正しい。

昭和四十五年に刊行された彼の『郷土の地名』にはどのくらい啓発されたことか。その後も郷土について何か書く時には屢々彼の著書を参考にさせて頂いた。殊に北条早雲の出自についての研究は、永いこと異説として評されていたが、今日では望隆氏の備中井原説は学界においても公認されている。私は彼の徹底究明の成果には深く頭を下げるものである。さらに言えば、彼は終戦直後からの久野古墳群の発掘を皮切りに、小田原の郷土史研究の大先輩であり、わが小田原史談会創立の功労者でもあることを忘れてはならない。

西山銈太郎さんを偲んで

柳川辰夫



ありし日の西山銈太郎氏

この世に生あるものはやがて滅すとは申せ、西山さんの急逝の報に接し、あまりの突然でござるきは申すまでもござりませぬ。私が最後にお会いしたのは二日程まえのこと、日常生活の中で日課とされておられる散歩もいつもながらのお元氣なお姿でした。

とき、平成七年六月三十日、享年八十五歳のご高齢で不帰の人として雲上の旅立ちをされましたことは追惜の情にたえませぬ。西山銈太郎さんは明治四十三年七月二日、当時の足柄下郡下曾我村岸に生れ、大正十三年三月下曾我小学校第一期生として卒業し、昭和元年三月自修学校を卒業、この勉学する中で家業(農業)の手伝いに励まれた苦勞話も聞かされた。青年時代には、父親の片腕となり家業に専念、そのあい間に青年団活動に意をそがれ地域のリーダーとして活躍されておりました。

兵役については簡略しますが、軍隊時代は一死報國を誓い男子の本分を捧げられた。終戦はスマトラ島で迎え、二十一年八月に帰還されました。

復員後、西山さんは誠実な人柄で、常に地域のために奔走されておられ、多くの要職を歴任されました。村会議員は小田原市と合併まで務められました。

以来、民生委員、農業関係委員、自治会長等々にご尽力下さいました。今さらながら西山さんの人徳を偲ばれる思いが致します。

ところで、西山さんと私との出会いを今、思うに同地区でありながら住まいも離れ、その上、年齢も二十歳程の隔たりもあり、まして勤めておりました関係で余程のことがなければお話しする機会もありませんでした。

折しも、昭和五十一年に自治会長に就任されたとき会長の補佐役として私に副会長を仰せつかり、それ以来約二十年間何かにつけ心にとめて下さいました。

当時、小田原史談会の会員でおられ、一方、郷土史

に深く関心をもち、その調査研究に情熱を傾注されておられました。折りにふれ会話の中で史談会の趣旨などを述べられ、柳川君も入会してはと呼びかけられ会の一員となりました。

西山さんの意思については前記のように、曾我の郷に係わる歴史の伝承と、ひっそりとひそむ多くの文化遺産の掘り起こしに取り組み執筆も誠に多彩をきわめており、その熱意がうかがわれました。

ある時、これからは若い人達がふる里に秘められていく多くの遺跡等を発掘するとともに、古老が健在である間に地域の伝承などを見聞し、後世に書き残すことが柳川君達の課せられた課題ではと強く提唱されました。しかし、浅学のため唯々西山さんにお継ぎするのみでした。

曾我の里も年毎に歳時記により多くの人々が散策するようになりました。これらの対応と更に、地域の活性化のために我々としても多くの知識を修得する上で、ふる里探訪を計画、その折に西山さんに相談に伺ったことも度々ありました。

この時期に一時体調を崩されておりましたが、病気のことは一切口にせず熱心にご指導を賜り、お蔭で数回のふる里探訪の行事が大勢の参加により有意義に終りました。これも西山さんのお力ぞえによるものと敬意を表する次第です。

今、史談会報を見るに、地域の今昔の行事や、史話伝説、民俗等数多くの活字を残されております。特に永年上曾我の瑞雲寺総代でおられた関係で、当時まつわる伝記や「しおり」など記述され、更に、明治四十三年創立の私学として知られた自修学校物語り、また、近衛歩兵第一聯隊の兵役時代など、多彩に富んだ誠に貴重な執筆を数多く残されましたことは、会員随一の寄稿者としても過言ではありません。

晩年はお体のご不自由にもかかわらず史談会に生涯の理想を埋め尽くされましたことは誠に多大でございます。私達も西山さんの遺志に添うべく誠心誠意微力ながら務めることをお誓い申し上げるとともに、ここに謹んで御冥福をお祈りする次第です。

台草

飯田悟郎氏の追悼

富田千春

(A) 飯田悟郎先生の葬儀

七月二十一日の夜、岡部さんから飯田先生死去の知らせが来た。入院中とは知っていたが突然で驚いた。史談会今年の初詣、遠州一之宮、袋井の可睡齋等元氣に行ってきた。三月循環器病院に入院、四月山近病院に移り、五月十六日進行性ガンを胃の摘出手術、経過は順調との事、そのうち見舞いと話していたが、脾臓、

肝硬変の余病もあり容体急変し、七月二十一日午前十時三十分、肝不全での訃報でした。翌朝岡部さんと

参上、遺体は自宅に戻り奥の部屋で布団に北枕で安置されていました。葬儀一切、多古のカルチャーボックスで、通夜は、二十二日午後六時から、役員その他十数名参加しました。史談会としてせめて花輪をと決めたが、祭壇の関係で生花を供えませんでした。告別式は二十三

日午前十一時から、導師は日蓮宗妙円寺住職、喪主は妹の飯田峰さん、私が小田原史談会を代表して弔辞奉呈、会関係二十名程参列、厳粛、盛大な葬儀でした。

(B) 飯田悟郎先生の横顔

先生は昭和三年六月三十日現住所の寿町、その当時足柄村町田三〇〇番地に生まれ、父は飯田真吉氏、母はトヨさんの六男四女の五男、父は陸士第十五回生、日露戦争の時、勲四等功五級の金鷄勲章をもつ軍人だった。その父親即ち飯田先生の祖父は、小田原藩の士族で、明治維新、廃藩置県で町人になり、栄町石寿堂隣で傘屋等を営んでいたが町人の生活は難しく東京へ移った。代々士族の家で大久寺が菩提寺だったが、一緒に東京江戸川の浄土宗大泉寺に墓も移したが、父の時小田原の現在地に戻り久野霊園に墓地をとった。

飯田先生は足柄尋常高等小学校芦子分校に入学したが、二年生の時左足のくるぶしの結核性関節炎の大病にかかり、津田外科医から足切断手術と云われたのを母親が反対し、治療に苦力

切断は避けられたが、三、四年生、兄が送り迎え松葉杖での介護の生活も何とか乗り越え無事卒業。初め小田商に入学。中途父親の骨折りで小田原中学に転入学、昭和二十年七月、父親が死亡、学資を出して呉れる人が無くなり、続いて敗戦と試験の生活が始まったが、昭和二十二年小田中を卒業、本人のガンばりりで米軍キャンプに就職と共に神奈川大学に入学、特待生として給費生制度で貿易科卒業、中等学校教員免許状を取得した。

勤務校は、小田高を振り出しに白鷗中学、城東高校、城北工業高校、相模台工業高校、最後が山北高校に転勤、三十年勤務したので定年前ではあったが、体調も考え、趣味を活かして昭和五十九年三月、五十六歳で退職、その後は非常勤として週二日、山高の英文タイプの指導にあたる。

(C) 史蹟めぐりで活躍

子供の時足を病み歩行が一寸不自由だったが、成人になって二輪車の免許をとって、喜んで北海道を始め全国を走り廻った。昭和二十

六年には四輪の免許をとり、暇をみては好きな史蹟名所を巡りまわった。この為、史蹟めぐりの計画立案から下見、バスの道案内まで一切お任せの形だった。

平成五年七月、坂東観音霊場めぐり昼食の中嶋養魚場の川魚料理「瓢箪玉」等先生ならではの収穫だった。

平成六年九月、高幡不動尊から大國魂神社、深大寺、武蔵国分寺跡等古代武蔵野文化探訪も盛沢山だった。特に昨年秋の那須白河方面一泊研修の下見は素晴らしかった。十月二十七日、一泊二日を一日で何とか強引に下見した。長い道程なので妹さんの車で、妹さんと交替運転、三時起きをして出発、会計の向山さんと私と四人の一行で下見した。雨の中東名で東京に出たが、街はまだ眠っていて電灯がいったいいついていた。夜明けと共に雨は止み、お日様も出て天気になった。白河I.C.から小峰城跡、白河の関跡、那須国造碑、資料館、塩原で昼食、宿泊ホテルを下見して、日光もみじライオン山道を今市へ、報徳二宮神社参拝、蓮田で夕食、大行程だったが予定通り一巡



ありし日の飯田悟郎氏

夜九時無事帰宅した。亡くなる九カ月前になる。

今年の初詣、その他数え切れない下見、史蹟めぐり、先生にすっかり御世話になり良い足跡を残された。

(D) 貧困児の修学援助

人柄と専門の語学を活かしてタイのバンコク、フィリッピンのマニラの貧困の

余生を思う存分に生きた

高井喜雄さん

岡部 忠夫

分かる。

高井喜雄さんは、二冊の自分史を遺しているが、一風変わった趣向を折り込んでいる。月並みを嫌う高井さんの所産でもある。

一冊目の『老人問題とわが余生』には奥付がない。

その代りに、「ほんのへそとでもいへば奥付を隠して見せぬへそまがりかな」と狂歌まがいの歌を添えて、自分が臍曲がりであると、謳っている。発行年月は、その序文から昭和四十八年五月、古稀の出版記念だと

子供の親代わりになって年二万円の出費を出して修学させている子供が十数名あり、年四〜五回現地に行ったり、文通で激励したり、古い学生服、下着類、学用品を贈ったり中々出来ない事を続けて来られた。子供の卒業式には学校から招待があり三月には来賓として出席されたとか、素晴らし

い国際的ボランティア活動です。

(E) 史談会での活躍

中野会長が亡くなり、事務局沖山さんの事務を分散し、役員が分担し運営する事になり、平成元年から私が会計を、飯田先生に会員部をお願いする事になり、何百人もの会費の集金、整

いどころか、本が古びてしまつと、何年後かに配っている。この奇矯めいた高井さんの行動の心底には、自分の戯画化して、自らを楽しむ対象とした、軽蔑した姿が伺える。

二冊目の本を出す三年前の昭和五十七年、高井さんは、生前の葬式を出そうとしたが家人に猛烈に反対され、こっそり菩提寺の住職に引導を渡してもらっている。「高井家先祖の墓」と墓銘を刻んで墓石を新しくした。その傍らに墓誌を建て、その中に自分の戒名をも刻み込んだ。

その戒名たるや、なんと高井さんが趣味にする「現代どどいつ」に用いる、風喜洞平方坊の号の前半分を

集まると、月に何回となく家まで車で遠い所を持って来て貰いました。その都度玄関や、日の当る縁側で好物の甘い物で粗茶を飲みながら、色々の話をするようになり、出合い、ふれ合い色々のお付き合ひをするようになったが、これも人生のご縁でしょう。

ワープロ等の特技をお持ちなので総会資料の印刷をお願いしたり、車を重宝に利用したり、なお、以前から古墳の調査や研究に造詣が深く、史談にも「古墳遍

歴、知られざる皇陵」の連載もあり、ずっと常任理事、編集委員の要職をお願いしており、色々の面で史談会の中心的活動をされていて、今後益々小田原史談会の上で活躍を期待していた矢先、日本は十年連続世界一長寿国、人生八十年百歳とも言うのに、六十歳台の人生は誠に残念ですが、先生の歩まれた素晴らしい人生、残された功績の数々を胸に収め、哀悼の念をこめて追悼いたします。

したが、それは、世俗に対する反逆であった。

こんなこともある。

昭和五十五年、家を新築するとき、本屋に接続して一間の廊下伝いに六畳の居間を造った。世間並みに言えば隠居部屋なのだが、そのような考えを否定して、箱根外輪の明星岳の名をとって、明星庵と名付け、玄関を本屋とは別に作った。

そして標札には、住所氏名その他に

明星庵 風迅洞どどいつ 教室事務局 高井平方坊

の名を入れた。屋根は、

洞風喜芳居士遺稿 悔いなき生涯

明星庵主 高井喜雄

とある。始めは、余命いくばくもないから、死んだときの形見分けの積りで、友人、知人、縁者に渡すようにと筆筒の中にしまい込んでいた。余命いくばくもな



用意周到に写真を遺していた高井さん

茅葺きにしたかったのだが、建築基準法にひっかかるので、こればかりは許されず、本屋のステンレス銅メッキの屋根とは違って瓦葺きとした。あくまでも、隠居部屋でないという主張であった。

それに、明星庵は、鬼門の位置に当たっていた。予め分かっていた事だが、あえて無視したのである。それは、因襲への挑戦でもあった。自らの行動を自分自身で面白がっていただけではなかったのである。

話はあと先になるが、風迅洞どどいつ教室の事務局を引き受けたのは、余生に入っている昭和四十六年の事

でその後十年間も続けた。

風迅洞どどいつ教室を主宰したのは、NHKの芸能局長、理事・中央研修所長を歴任した中道了文氏。中道氏は、プロデューサー時代に、和歌・俳句の折句にヒントを得て、七七五の都々逸形式に応用して、昭和二十五年、NHKとんち教室に登場させた。

月並みを嫌う高井さんは、古い都々逸から抜け出した新しい「現代どどいつ」が気に入ったのであろう。また、それを創案した中道氏にはこれこんだと思われる。

その事務局の仕事の一つに、会員が送ってくる作句と風迅洞の選評を載せる、月刊機関誌「現代どどいつ」

の編集発行があった。事務局を引き受けた当初、会員数が少なく赤字続きのため、私財を投じての入れ込みみうであった。

昭和五十三年、七十四歳のとき、春・秋二回に分けて、四国八十八カ所の遍路の旅に出たときのことであった。予め、その計画を鎌倉円覚寺朝比奈老師に話した。高井さんは、ちょっとした事で老師に近づきとなり、何回か円覚寺を尋ねていたのである。

老師は、遍路の旅に出ることを聞き非常に喜び、ご詠歌の和賛について説いた。「和賛の「和」とは、人と仏が心を一つにすることであり、和賛の「賛」とは、真心をこめて念じ唱えることである」と。そこで、高井さんは、老師に尋ねた。

「札所でご詠歌を唱えるには真心をこめて唱えてよいということならば、真心こめさえすれば、ご詠歌でなくとも差支えないか」と。

老師の答えは、「それで差支えない」ということだった。老師にすれば、観音経でも修証義のような、念佛経ぐらいなら差支えないと、

思っていたのであろう。

ところが、高井さんの気持ちの底には、心裡留保があった。老師の思いもつかない事を腹に決めていたのである。

それは、日本の昔からの義太夫、浪曲、どどいつ、民謡、それに新しい歌謡曲をも札所毎に変えて「真心をこめて」唱え奉ることだった。元来、器用なたちの高井さんは、これらの歌をこなしていた。ただ森進一、村田英雄、美空ひばりの歌謡曲については、レコードを買いこんで練習を重ねた。

ご詠歌だけは、第一番と第八十八番に限って唱えることとして、八十八カ所の一覧表を作った。

姿だけは立派なお遍路姿で、春に、南四国の巡礼に旅立った。

第二番目の札所で、自作のどどいつを唱えてからは、野次馬観光客が後をつけて来て、何等はじらいなく物おじしなかった流石の高井さん、他のお遍路さんに迷惑をかけるのは忍びないと、ハイヤーを使って、日程表通り十日間の旅を終えた。

当然、高知新聞は、神聖な霊地で、ご詠歌がわりに

種々俗曲を歌って甚だ不屈至極と批難の記事を載せた。

ところが、秋の北西国の巡礼では、愛媛新聞の記者が取材に来て、巡礼姿を写真入りで、常識を越えたやり方を囁かした報道をした。

※

高井さんの余生の、常軌を逸した行動、意固地な迄の自己主張の陰には、こんな事がある。

陸軍少尉の肩書きを持つ高井さんは、戦争中、教職を勤めながら、桜井村(小田原市栢山・曾比)在郷軍人分会長を兼ねた。また、昭和十九年四月、学制改革により青年学校が全国的に創設されると、三十九歳の若さで千代青年学校長に抜擢された。就任式には、陸軍少尉の軍服帯刀の姿で臨み、来賓に河野一郎代議士が臨席。高井さんの士気は溢れんばかりであったらう。

当時、わが国にとって、戦況は、日に日に不利となり、敗戦の色濃く、国を挙げての決戦非常態勢がとられ、悲壮な覚悟が国民に課せられることになった。

高井さんは、青年学校生徒は勿論のこと、在郷軍人を始め、青年団、婦人会、

女子青年に至るまで、軍事訓練・防空訓練の指導に、文字通り、連日、東奔西走した。しかし、過労が原因で、八月、突然脳障害で一週間意識不明となり、生死の境をさまよった。幸い、生れつき頑健だった高井さんは、意識が戻り、一命をとりとめた。

まだ、病後の身体機能の快復が遅く歩行がやっと出来るようになった十一月末、召集令状が舞い込み、千葉県柏の東部第八十三部隊に入隊することになった。当時、すでに制空権を奪われた硫黄島に派遣の一箇大隊の編成要員として召集を受けたのだが、身体検査の結果、病人として部隊に残留させられることとなり、東部軍司令部管下に転属した。そこで与えられた軍務は、大森と三河島の捕虜收容所の巡察将校であった。

やがて、終戦、そして東京にマッカーサー司令部が進駐すると、捕虜收容所の巡察将校であったかどで、MP(憲兵)に逮捕され、横浜軍事法廷の裁判にかけられ、B級戦犯容疑で小管刑務所に收容された。

そのとき、高井さんは、これからは世のため人のために一切尽さない。残った人生を自分に忠実に生きるのを誓うのだった。

高井さんは、本来ならば一年半の徴役を食う筈であったが、入獄中、首実験の立会人に、高井さんと親密になつていた三河島英軍捕虜の主任将校が当たり、高井さんの任務が、捕虜收容所が国際法によって、捕虜を正当待遇しているかどうかの巡察将校であった、という証言によって、即日帰宅が許されることとなった。

しかし、公職を追放された。在郷軍人分会長をしていたためで、不本意ながら二十一年間にわたる教員生活にピリオドを打った。

そして、戦後食糧難で、育ち盛りの五人の子を抱えての苦難の道を歩むこととなるが、昭和二十四年正月、教え子が社長の印刷会社に重役として迎えられる。

教員生活を送った人は、頭が高く世間の事を知らないすぎるとよく言われるが、高井さんは、それを乗り越えていった。始めて知る実業の世界、世の中の人間の表裏、その他数々の体験を

重ねることとなる。

昭和四十四年、六十五歳を期に印刷会社を退社。その間、丁度二十年間で、教育界と同じ年数になる。

※

高井さんは、大正十三年、鎌倉師範学校卒業して初めて赴任した瀬谷小学校(横浜市)を離れ、足柄小学校(小田原市)に転任して来た。昭和三年四月二十五歳のときである。そして、東栢山の青年団長となり、昭和二年御大典記念事業として、二宮尊徳の遺跡の、松苗を酒匂川堤防に植えた場所、捨て苗を植え一俵の米を収穫した場所、仙了川堤に菜種を栽培した場所、三カ所に記念碑を建てる計画をし、団員の勤労奉仕の基金により建立している。その碑は今も残る。

また、昭和六年、栢山出身の満州事変での戦死者の村葬(わが国最初の村葬という)を挙げるに当り、中戸川村長は、足柄小学校森丑太郎校長と話し合い、県の了解を得て、陸軍少尉である高井さんを桜井村在郷軍人分会長として、村葬施行の任に当らせた。高井さんは、学校勤務の傍ら、甲

府連隊司令部に出張し、村葬の要項細目の計画を作り、村内諸団体と打ち合せを行い、村葬を執行した。この村葬は、県下は勿論、全国何十万の戦死者の雛形となつたという。高井さん、ときに二十七歳。

※

既に公職追放は解除されている。地域の人は、余生を送る高井さんを見逃す訳はない。市会議員立候補や、自治会、PTA、その他諸団体の役職に就くことを、しばしば要請された。しかしその都度、堅くこれを断っている。

学校長迄になった人が、郷土のために一つも骨を折らぬ個人主義に凝り固まった不屈者と、地域の人から批難されたようだが、高井さんは意に介しなかった。

しかし、見知らぬ初対面の人でも、永年の知己の如く近づき振る舞うことが出来る高井さんは、隠遁することが出来る筈はない。

それに、余生において、「奉仕」という生活精神は大切な生き方であるとする高井さんは、表立った役員とか世話役だけが奉仕とは考えなかった。

蔭では人の為に尽くしている。「世のため人のために一切つくさない」というのは、高井さんの反語であった。それに何組かの縁談をとりまとめ仲人を勤めた。

先に挙げた「現代どいつ教室」の事務局を引き受け、会員のための仕事をしている。

また、小田原市児童文化専門委員を長年続け、小田原市内の幼稚園、保育園の幼児に童話の奉仕を続けた。

高井さんは、童話の名手だった。童話の創作も手がけている。その話ぶりは子供たちを魅了した。そのうまさは、今でも、教え子の語り草となっている。雨で体操が出来ない時間は(現在のように小・中学校に体育館はなかった)、体操の代りに、高井先生の話を楽しみにしていた。

※

高井さんは、鎌倉師範学校四年のとき、県下の各学校や、あらゆる庭球クラブと三十回以上の対抗試合で全勝。秋の中学校全国大会では、この年の関東大震災でコートもなく練習不足に拘わらず、全国出場し、三七〇組を勝ち抜き、決勝戦

特別賛助会員

- | | | | |
|--------------|---------------|---------------|-------------|
| 智恵袋 | 相田酒造店 | 正 榮 堂 | 玉 鬘 |
| 小田原銀座 | アオキ画廊 | 中華料理 昇 | 杉山水道工業 |
| 熱海 | アオキクリニック | 杉山 夙 | 夙 木まぼこ |
| 足柄香粧株式会社 | 飛 鳥 | 辰寿堂スポーツ | 不動産 |
| 紳士服の | アメリカヤ | 大 営 不 動 産 | 海 |
| (株) アルファ | 画材 ガクブチ | 割 烹 釜 る | 宮 |
| 伊 勢 治 書 店 | 伊豆箱根トラベル | 茶半家具株式会社 | ちん 聖 う 本 店 |
| かまぼこ | 南足柄関本 | 土谷建設株式会社 | 角田ガクフ子店 |
| おぎの整形外科・歯科 | 小澤重治事務所 | 東京電力(株)小田原営業所 | 軒 花 店 廿 店 |
| 小田原魚市場 | 小田原ガス | 株式会社 東 華 | ト 一 ホ 一 建 物 |
| 小田原市農業協同組合 | 小田原報徳自動車 | 和 菓 子 菜 の 書 | 八 小 堂 |
| オートセンター・スギヤマ | 小田原中央青果 | 八 子 井 書 | 富士写真フィルム |
| オリオン座 | かまぼこ 籠 | 徳 屋 松 坂 | マルク |
| 鐘紡株式会社小田原工場 | カネボウ化粧品鴨宮工場 | 食器の店 マルサンストア | みつゆき設計 |
| 神尾食品工業 | 木地挽 日下部産業 | 諸星運輸グループ | 美濃屋吉兵衛商店 |
| かみやま小児科クリニック | 興 電 社 | みみづく幼稚園 | ヤオマサ株式会社 |
| 小 伊 勢 屋 店 | (有) 小 松 石 材 店 | 山 口 菓 子 舖 | ユアサコーポレーション |
| さがみ信用金庫 | 趣味のごふく さくらい | 宝飾専門店 Shimano | 防災器具 優 光 社 |

で惜しくも敗れもしましたが、鎌師庭球部の黄金時代を築いている。

庭球だけでなく、バレー・バスケット・野球・卓球なんでもござれと、酒匂川を挟んで、川東と川西の教職員

の対抗体育会で、全種目に選手として活躍。小学校や青年団の競技会では審判長をつとめた。

高井さんの生命力は強かった。生れつき頑健なうえ、

スポーツで体を鍛えている。何回か重病に出遭っていたも、その都度、死線から抜け出していた。

先にあげた、昭和十九年八月、脳障害で一週間意識不明となったのも、その例である。

昭和五十五年、七十七歳のとき、法事の席上、脳血栓で倒れたが、運が良かった。すぐ近くの病院にかつぎ込まれ、一カ月程の療養

で健康が戻った。昭和六十年、心筋梗塞に襲われた。この時も運がよかった。気持ちが悪くというので病院に出かけたところ、その日は週一回、東京から心臓専門の名医が来る日で、手当てが早かったため、病気を克服する事ができた。八十三歳の時のことで、医師が手がけた心筋梗塞の患者の最

高年齢であったという。そして、昨年(一九九四年)の十二月、

風邪が元で入院したが、老齢である。暮がおしつまって、家人たちは、正月そうそう葬式を出すのではと懸念する程の状態であった。

その心配をよそに、二月二十六日、九十二歳の生涯を閉じた。

生前、心筋梗塞の治療に当った医師に、自分が死ぬときは、延命装置を用いないで自然に死なして欲しい

と申し出ていたが、入院した時は担当医師が違っていたため、その願いは叶わなかった。しかし、そのためか、二回にわたって自分で、医師をたまげさせた。

幾多の困難を乗り越え、人生の表裏を知りつくした高井さん、その生命力の強さが支えとなり、余生を遅ましく過ごさせて来たに違いない。

小田原史談(年四回発行)

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円
〇〇一〇二六四三三六
小田原史談会会員部